

11月13日 第4日目

花蓮最終日の今日はバスで慈済大学附属高級中学校（日本でいう高校）へ。

慈済大学は大きな附属病院を抱える医学部を持つ大学で、幼稚園からのエスカレーター式。仏教系であるところに特色があり、その利他的精神に基づき、幼稚園でも先日のインドネシアの地震・津波被害に対するアクションを起こしたという。

到着してみると、玄関には中華民国と日本の国旗が飾られ、本日バディとして本校の生徒一人ひとりとペアを組んでくれる学生たちが歓待してくれた。

歓迎のセレモニーでは校長先生から歓迎のお言葉をいただいた後、両校生徒が自身の学校に関するプレゼンテーションを行った。本校では1年生が担当し、本校の概要をコンパクトに紹介してくれた。

その後記念品の交換と記念撮影を済ませ、3つのグループにわかれて午前中のプログラムである授業体験へ。Aグループは生物の実験で魚の解剖を、Bグループは第二外国語としての日本語の授業に日本語のスペシャリストとして参加、Cグループは台湾料理の調理実習と三者三様であった。報告者は主にCを参観していたが、授業は100%中国語で行われたものの、細やかに配慮していただき、大きな難もなくこなせていた（ちなみに本日のメニューは花蓮周辺でよく食べられているという野菜を用いた炒め物と、キクラゲ・唐辛子入りの卵焼きだった）。

昼食の弁当は仏教系の学校というだけあって、肉を一切使わないものだったが、日本の精進料理より見た目も鮮やかで、さっぱりとして食べやすい。

午後は本校生徒とバディの学生たち全員で「カンフー体験」へ。動きやすい恰好への着替えが求められたため、ハードな運動も覚悟していたものの、やはり1時間では到底カンフーの本質を伝えることはできないとのこと、先生の妙技を見守り、拍手を送る時間が大部分を占めていた。ただ、ヌンチャクを振り回して思い切り自分の身体を打撃することで、生徒たちはいくらかカンフーの神髄を味わえたのかもしれない。

最後に本校生徒によるプレゼンテーション。40分の時間が用意されていたので、2年生が岩手県の紹介を、さんさ踊り体験のアトラクション付きで行った。出発前は課題研究のプレゼン準備に追われ、こちらの発表まで手が回るか心配していたものの、それが全くの杞憂であったと思わせるほどの堂々たるプレゼンテーションであった。台湾の学生たちもしっかりと踊りの輪に加わってくれ、予想した以上の大成功に終わった。それに対し、台湾の学生からもダンスや本日の感想のスピーチの披露があり、あっという間に全行程が終了、別れの時を迎えることになる。

本校の側では俄かに号泣し始める者、それにつられて涙する者（引率者含む）、それを見送る学生さん側も走り出すバスを追いかけていつまでも見守ってくれる者と、今朝会って、たった数時間しか共有していないとは思えないほど濃密な別れの場が展開された。

個人的な印象ではあるが、欧米圏の高校生とはお互いがここまで深く短時間で歩み寄ることはできないのではないかとも思う。それぞれがそれほど流暢でなくともでき得る限りの英語で意思を交わし合い、別れを惜しむ。並々ならぬ歴史的因縁を持つ日本と台湾の高校生が、これだけフラットな関係で交歓できたということに、大きな感動を覚えた。

学校を出たバスは花蓮の駅へ向かい、再び鉄道で台北へ。

これから10日間強の我々のベースキャンプとなる政治大学の寮に到着したのは八時を回る頃。その様子についてはまた改めて紹介したい。

正門でのあたたかいお出迎え



1年生による学校紹介



調理実習を終えて



カンフー体験中



2年生プレゼンツのさんさ踊り体験



締めは校長先生の自撮りで

